

夢童

菅波 茂

「救える命があればどこへでも」のスローガンのもとに、AMDA多国籍医師団を災害医療救援活動に派遣している。しかし、その積極性には、一つの疑問が常につきまとう。AMDA内部からの謙虚な問いである。「空撃ちはないのか。支援者撃ちはないのか。支援者の貴重なお金を無駄に使っていないのか。信用を落とすことにならないのか」と。確信を持ってお答えしたい。「災害医療救援活動は、常に『未知との遭遇』である。その遭遇は新たな経験と見識を与え続けてくれ、更に新たなご縁を生んでくれている。従って、AMDAの活動に『空撃ち』はなし」と。

AMDAの災害医療救援活動に「空撃ち」なし

将来に備えた解決策として、アジアの医学生ネットワークを80年に創設した。アジア医学生連絡協議会(AMSA)である。84年にはそのOBによってアジア医師連絡協議会(AMDA)が創設された。カンボジア難民キャンプでの挫折感が、26年後に国連経済社会理事会の総合協議資格認定NGOになる直接の契機になった。

05年9月。米国南部を襲ったハリケーン「カトリナ」被災者救援に医療チームを派遣した。日本の避難所の「弱者救済」と異なり、「敗者復活」のコンセプトのもと、避難所には仕事を開始するための小規模融資や、移動のための無料航空券などのプログラムが用意されていた。FEMA(米連邦緊急事態管理局)は、保健に関しては赤十字に、住居に関してはサルベージするほど判断力が低下する。極論を言えば、募金を頂く可能性がなくても、赤字覚悟で災害発生直後から救援プロジェクトを実施した時ほど、不本意な活動結果となっている。災害は不条理である。不条理に對抗できるのはお金より、お金と接触した時、非常時に評価された。1年の歳月後に、米国とベトナムとがつながるとは夢にも考えなかった。

「救える命があればどこへでも」の気持ちで実施される災害救援活動に、合理性と効果性を持たなければいけない。合理性と効果性がある。合理性と効果性がある。合理性と効果性がある。未知との遭遇である災害救援活動に「空撃ちなし、無駄なし」である。(AMDA代表)